

## 釣人の話（その一）

佐藤 孝 三 郎

早春になると、卵をもつて一番早く上ってくるのは、マルタなんです。二月の末から三月の中頃まで上ってくるんですが、今釣れるような小さいんじゃなくて、一尺以上というのはざらでした。体にきれいな色がついて、卵をいっばいもつた見事なやつでね。

私の子供の頃、大町の子供達は気がついたら桜川堤で遊んでいたという位、桜川に縁が深かったですね。七つ八つから釣をしていました。その頃は釣はひとつの遊びでした。釣竿といつても今みたいなもんじゃなくて、三銭で竹の延竿から仕掛け全部買えましてね、最初釣り始めた頃は、タナゴだのエビを釣っていました。タナゴやヤマベは、めしつぶで釣つてもずいぶん大きなのが釣れましたよ。鮎に至つては、一尺以上というものをずいぶんあげました。これは終戦後のことですが、半日で四貫以上も上げてね、尺鮎の、今じゃ想像もできないほど見事なものも幾匹もまじっていたもんです。今じゃ信じられない昔話になつてしまいましたが、それでも、わずか二十年位前の話ですからね。

それじゃまず四手網の話をししましょう。

これが終わると、その次はサイがとれ始めるんです。四手というのは、サイ網といわれる位、四手とサイは切り離せないものなんです。サイを取るのが目的だったんですね。三月中旬頃は、夜しかとれないんですが、南風が吹いたら、水が動いていくらか濁つたりすると、昼でも採れるようになりますよ。それが水がぬるむと、花見サイと言われてましてね、花見の頃、桜の花が咲く頃になると、昼間も夜も同じようにとれるようになります。四十年位前、私の祖父の時代のことですが、信じられない話があるんです。

三月の末の事だったそうですが、前の日まで南風が吹いていて、それが急に西風に変つたんです。そして、その西風が一日中吹き荒れて、とても網を上げられなかつたんです。川の上流から吹いているのでどうにも網が